

随筆

税理士に未来はあるのか

仙台北支部 桑畑弘道



先日の確定申告時、ある婦人のクライアント宅へ伺ったとき

のことだ。その婦人は三年前から当事務所で関与させていただ

いている。内容は主に不動産所得と年金。ご主人が亡くなり、使わなくなったスペースを駐車

場として貸しているというものであった。齢八十歳に近いにもかかわらず実にかくしゃくとき

かれており、厚着で臨むこちらの方が恥ずかしくなる。無事、申告準備作業が終わるものと思わ

れた矢先、その一言が放たれた。「先生、私は安心して死んでもいいのですよね」思わず聞き返

す。「今、何とおっしゃいますか?」「私が死んだ後も全てお願いいたします。先生に出会えてよかったです」

算で縁する。商売を始めれば、それこそ一から世話をし、時に死に目にも立ち合う。思うに、これほどまでに人と関わる仕事とは、この仕事を指すにあたり想像することが出来たであろうか。

私は九州、熊本の出身で、大学進学のため上京。入学した当初より国家試験の受験を決めており、当初は会計士試験を目指していた。しかし、大学二年の

とき、大学の先輩である西山恭博税理士(東京税理士会)に激励を受ける機会があり、その折

「税理士は庶民の味方だ」との言葉に触れ、感動。迷うことなく税理士志望へと転向する。まさに、ここが自分の人生の分岐

点となった。西山さんには今でも心から感謝している。その後、大学四年次には国税三法を含む

五科目一括での受験に臨み、惜しくも二科目を逃してしまいが、この時の死に物狂いで勉強した

経験は人生の宝となっている。特に大きな仕事に臨むにあたっては、「あの時もやれたじゃないか、この山も絶対に乗り越えてみせる」と今でも心の支えとなっている。まさに、吉川英治の「苦徹成珠」(男子ひとたび

立てるなら負け朽ち果ててなるものぞ。身は粉となるもなにかせむ。苦に徹すれば、珠と成る)であろうか。私が受験時代、心の糧として口ずさんできた大切な金言である。

大学を卒業してからは都内の会計事務所にお世話になり、実

にいろいろ仕事をさせていた。併、デューデリ、大手企業の立ち上げ等々。一番の若手だった

が故、事務所には多大なご迷惑をお掛けしたかもしれないが、私自身にとってはなにもものにも代えがたい貴重な経験をさせて

いただいたと今でも感謝している。このように仕事に邁進して

いた頃家内と出会い、結婚。仕事もプライベートも多忙ではあったが充実した日々の中、ある日

ふと試験を始めた頃の自分を思い出す。「自分がこの仕事を目指したのは何のためだったのか」。確かに東京のど真ん中で、自分なりに頑張っているかもしれないが、それは本当に自分のし

で始めた道ではなかったのか、との思いに駆られ、決心。二〇〇〇年に退職し、家内の実家のある仙台の地へ引っ越してきた。正直、退職にあたっては大変だったため後ろ髪を引かれなかった

と言えは嘘になるが、高村光太郎の「僕の前に道はない/僕の後ろに道は出来る」との詩の如く、誰に理解されなくとも自分

の信じた道を歩むのだと決断する。実際のところは、九州の両親の理解が唯一の救いであった。

早いもので仙台の地に来て七年の年月が流れた。その間、周

りの皆さんに支えられ無事税理士法人も設立できた。一昨年から

は東京事務所も本格稼働している。現在は岳父とともに事務所

の共同代表をさせていただき、また優秀なスタッフにも恵まれ、皆で少しでもいい仕事をと日夜

務を遂行していくことが何よりも大切なことだと考える。「税理士」という名称の中に出てくる「理」という言葉の意味には「ことわり」「ものごとの筋道」「おさめる」とのえる」という意味があるのだという。税というものごとの筋道をおさめる、とこのえるプロ、というのが税理士であるのだ。ここに税理士の存在意義も求められよう。時代とともに変化し、つかみよ

ない税というものを庶民のために筋の通ったものとしていく、その大切な使命を担っている仕事と自負したい。つまり、この

使命を全うしていく限り、クライアントの期待に応えられるだけでなく、税理士の未来は厳然と存在する。

冒頭の一婦人からの一言に対する私からの回答である。「ご安心ください。ご期待に応えられるよう更に精進して参ります。ただし、そのためにも一日も長く長生きしてくださいね」本来

自分がやりたかった仕事である。

